

公爵家に生まれて初日に

跡継ぎ失格の烙印らくいんを押されましたが

今日も元気に生きてます！ 3

## 登場人物紹介

エトワの護衛を務める  
跡継ぎ候補の子供たち

カシミア

気弱な平民の生徒。  
何か人には言えない  
悩みがあるらしく……

スリゼル

とても大人びた少年。  
失格令嬢のエトワにも  
丁寧に接してくれる。

クリュート

キザな腹黒少年。  
エトワのことを馬鹿に  
しているけれど……？

ミント

いつも無表情で  
人形のような男の子。  
魔獣使いの才能がある。

パイシェン

水の侯爵家の令嬢で、  
エトワの大好きな先輩。  
名門貴族の子が集まる  
桜貴会を仕切っている。

リンクス

赤毛のツンデレ少年。  
仮の主である  
エトワに片想い中。

ソフィア

可愛くて優しい  
天使のような女の子。  
エトワを慕っている。

天輝

エトワの能力の大半が  
封じられた剣。  
洗い男の人の声で  
アドバイスしてくれる。

エトワ

風の公爵家の令嬢。  
魔力が少ないせいで  
跡継ぎ失格の烙印を押された。  
元は普通の日本人で、  
超マイペースな性格。

## 目次

第一章	エトワにお願い券	7
第二章	魔王降臨 <small>こうりん</small>	27
第三章	Sランクの冒険者	53
第四章	魔法戦技 <small>アムデキュラ</small>	108
第五章	入れ替え戦	189
第六章	最後の戦い、最初の戦い	249

## 第一章 エトワにお願い券

魔族ヴェムフラムの襲撃から一週間後の話。

この国の第一王子ゼルは、父王の部屋の前で硬い表情で立っていた。ルヴェンドに戦力を傾けすぎたことによる、クララクの防衛の失敗。第三王子アルセルの努力のおかげで、人的被害は少なかったものの、その失敗は確実にゼルの評判を下げていた。

国民からは、ゼル殿下は王位を継ぐにはふさわしくないのではという声があがっている。あらゆる資質に優れ、人気も高い第二王子が継ぐべきだと。そんな中、父から呼び出しがあった。

「お入りください」

侍女に呼ばれて部屋に入る。ベッドに臥せった父が何か言う前に、ゼルは頭を下げる。

「も、申し訳ありません、父上。この度の失態は必ず挽回してみせます」

父王は優しい声<sup>こゝね</sup>で、しかし失望を含んだ表情でゼルに「座りなさい」と言った。ゼルは緊張した面持ちで椅子に腰をかける。父王はため息を吐きながら言った。

「今回の魔族は相手に強力な相手じゃった……。対応は難しく、被害が出ても仕方ない事件だったとわしは思っておる……」

「その通りです！ まさかあそこまで強力な魔族の集団とは……」

言い訳を始めるゼルの言葉を、国王は静かな声で遮った。

「それでも主要都市にきちんと足止めできる人材を振り分けておき、飛空船を準備し流動的に戦力を送れるようにしておけば被害は抑えられたはずだ……」

「はい……」

「しかし、問題はそれ以前のことだ……。お前は民を守るためでなく、自分の武勇を示すために戦力を使おうとした……。どんな結果であれ、評判は下がったであろう」

その言葉にゼルの額から汗が噴き出す。

「わ、私は……王家のためにそうしたので……。決して私欲からではありません……」

国王はどこか悲しげに首を振って、ゼルに諭すように言う。

「確かに王家の力のなさを憂うお前の気持ちもわかる。我らの最後の力、十三騎士もその忠誠を保証するものはどこにもない。彼らはただ取り立ててもらった恩義から我らに従ってくれているだけだ」

国王の目元は優しげでありながらも、王座に座る者としての苦勞を示した皺が刻まれていた。

「この国を本当の意味で支配しているのは四公爵、そして彼らに従う貴族たちだ。そんな彼らも貴族だけでは生きていけない。民が彼らの生活を支えているから生きていける。四公爵と傘下の貴族、そして民たちが我らを王と認めてくれるから、我らは王でいられる」

国王は深く穏やかな声で、ゼルに問いかけた。

「ゼルよ。そんな弱い王家では不満か？ 考えの違う四つの家と、その下に集う貴族と民。それらが一つの国としてまとまるために、ただそこに在る、そんな王では満足できぬか？」

国王の問いかけにゼルは答えられなかった。父の言葉に強い説得力を感じながらも、また若い彼には現状を変えたいという思いが、少なからずあった。

「王家を磐石にしたいと思うなら、空虚な権勢を誇示し尊大に振る舞うのではなく人々の信頼を得るのだ。そしてシルフィール家とは良い関係を築きなさい。彼らが味方でいてくれたから、王家は幾度もの危機を乗り越えることができた。そのために彼らはいくつもの犠牲を払ってくれた……」

国王は目を瞑り辛そうな声で言った。

「頼む……この父に辛い決断はさせてくれるな……。わしも決して良い後継者とはいえなかった。それでも父が私を選び、弟が支えてくれて、ここまでこれた。お前も王になりたいというならば、成長をしてくれ……。わしもいつまでもこの世にはおらん……」

「は……い……」

掠れた声で領き部屋を出ていくゼルを、国王は侍女と共に見送る。

「子を育てるのは国を治める以上に難しいことじゃのう……。わしは甘すぎるのだろうか……」

「そう思います。ですが、そんな陛下だからこそ私はお慕いしております」

交通事故で死んじやって、なんと異世界に転生してしまった、この私エトワなんです。

生まれてきたのが風の魔法使いの名家シルフィール公爵家。魔力がまったくなかったせいで、すぐに跡継ぎ失格の烙印らくいんを押され、十五歳になったら家を追い出されることになってしまいました。

でもまあ、意外と快適生活で、楽しく暮らしてたんですけど、そんな私のもとに五人の子供たちがやってきたんです。シルフィール家と血縁が深い、五つの侯爵家から派遣されてきた、私の代わりにシルフィール家の跡継ぎ候補になる、シルウエストレの君きみと呼ばれる子供たち。

そんな彼らに課せられた試験が、私を仮の主あまじとして仰おほぎ、護衛役を務めること。

彼らの仮の主をやりつつ、いろんなトラブルに巻き込まれたり、転生したとき神さまのところに置き忘れたパワーを取り戻したりして、護衛役の子たちと公爵家の本邸で過ごした私ですが、ついに六歳になり、ルーヴ・ロゼという学校に入学するため、ルヴェンドという町に引っ越すことになりました。

しかし、ルーヴ・ロゼは貴族のための学校！ 貴族失格の烙印らくいんを押された私じゃ、うまく馴染なじめない……！

さあ、どうする私って、どうしようもないから普通に過ごしました！

冒険者を目指す子供のための学校、ポムチョム小学校にも入学したりして、ルヴェンドで新たな生活を送り始めた私だけど、ルーヴ・ロゼの頂点に君臨する桜貴会おちきかいのトップ、ニンフィーユ侯爵家のご令嬢であるパイシエン先輩と、そのお兄さんルイシエン先輩との間でトラブルが起きてしまっう。

護衛役の子たちとパイシエン先輩たちが対立し、学校が分裂しかける騒動になってしまったものの、なんとかパイシエン先輩と和解して解決。私はなんとパイシエン先輩から、桜貴会に入会することを許されました！

ウンディーネ公爵家の次期当主シーシェさま、そして私たちの国の王子さまであるアルセルさまとの出会い。パイシエン先輩がいなくなったからやることになった生徒会長選挙での騒動。魔王の娘を自称するハナコとの出会い。いろんな事件に巻き込まれながら、少しずつ順調にルヴェンドで暮らせるようになったんですが、なんとこの町が、危険な魔族ヴェムフラムから襲撃を予告されたんです。

私は護衛役の子たちと離れて、古都クララクに避難することに……

でもでも、そのクララクこそがヴェムフラムの真の標的だったあ！

クララクを炎の都へと変えたヴェムフラムの攻撃に、私も巻き込まれてダウン。でも私と同じくクララクに避難していたアルセルさまが必死に治療してくれたおかげでなんとか復活！

そしてヴェムフラムを倒したんだけど、そのまま意識を失って、一年生の残りの期間のほとんどは入院生活に……。せつかく、学校で楽しく過ごせるようになってきたのに……

はてさて、そんな私も二年生になりましたー！

また一步大人の淑女レイディに近づいた私の姿を見てくれたまへー。

私は手の中の麵棒めんぼうを見ながら叫んだ。

「ない！」

ない。

「ない！」

ない！

「ないいいいいいいいいいいいい！」

なくなってしまうた。私の大切なアルミホイルが。

ポムチョム小学校の実習で使ったり、家でもアウトドア料理研究のために使ったり、ソフィアちゃんたちにも試作品を振る舞って、そんなことしてたら使い切ってしまった。

もう私たちも二年生になって三ヶ月ぐらい経ってるしね。なくなつたのはしょうがないし、なくても料理はできるけど、でもアルミホイルに慣れてしまった体は、もうあのころに戻れない！

「仕方ない、クリュートくんにもたまたお願いしてみよ」と

クリュートくんはシルフィール公爵家の後継者候補の一人で黒髪クロカミの美少年だ。ちょっと嫌味なところがあつて、私との関係は微妙。けど仲は悪くないと思つてるよ！

そういうわけで、私はささきさんとクリュートくんの部屋へと移動した。

「いやですよ。一回だけつて約束でしょ」

クリュートくんは椅子に座つて、本を読みながらめんどくさそうに言う。

確かに正論だ。そういう約束だつたし……でも……でも、

「一度便利さを味わうと、もうそれが無い生活には戻れないんだよ」

それは人の業わざ！ 愚かな人間の性さが！

クリュートくんはようやく本から目を離して言った。

「エトワさまの言うことを聞いて僕に何か得がありますか？ 前に約束したお願いの権利だつて結局使つてないでしょう。まあ別にいららないので、あんな約束、破棄はきでいいですけどね」

「ふっふっふっふ、そう言うだろうと思つて準備しておきました！」

私はクリュートくんに用意してきた秘策を見せる。

じゃじゃーん。

「なんですか？ その紙」

「口約束ではアレかと思つて、今度は証券化しておきました！」

紙には『エトワにお願い券』と書かれていて、私自作のスタンプも押してある。

「なんとこれがあれば、私がなんでも言うことを聞くんです！ ただし犯罪と後継者関連はNGにさせていただきますけど！ 期限は無期限！ しかも、今回は十枚セットでご提供!!」

それを見てクリュートくんは言った。

「いらぬです。いらぬもの十枚束たばねたつて普通にいらぬだけでしょ」

私はひざまずいてクリュートくんにしがみつく。

「ぐああああ！もしかしたら私が将来出世してめちやくちや役に立つときがくるかもしれないよ!? 良いのかい？ そのチャンスを逃して！」

「あなたが出世する姿なんて、まったくこれっぽっちも想像つかないのでいいですよ！」

「おねがいでよー！ おねががいいいいい！ クリユートくんが作ってくれたアルミホイルに夢中なんだよー。あれなしじゃ生活できないんだよー！ 作ってよー！ これで作ってよおー！」

結局、最後は泣き落としするしかなかった。

そう涙は女の武器。いい女は涙で闘う。

泣き落としの結果、クリユートくんは五月蠅うるさそうに耳を押さえ、額に青筋を浮かべて言った。

「あー、もうわかりましたよ！ 作ればいいんですよ！ 五月蠅うるさくて本も読めやしない！」

「わーい！ これどうぞ！」

「いらないます！」

「いやいや遠慮なさらずに！」

「本当に遠慮なんかしてないんですけど」

私は『エトワにお願い券』をクリユートくんにくいっと渡す。ぐいぐいっと。

「ああもう全部がめんどくさい！ もらってあげますから、行きますよ！ まったく……」

「へい、せんせえ！ よろしくお願いします！」

庭に出たクリユートくんは、アルミホイルをなんと十個も作ってくれた。

ありがとう、クリユートくん。これでアルミホイル生活が帰ってきた！

\* \* \*

クリユートは手の中に残された十枚の券を見てため息を吐いた。

「はあ、こんなゴミもらってどうしろっていうんですか」

まったくもって無駄な労働だった。何の得にもなりはしない。

あれがなくなったらまた来るんだろうか。恐らく来るのだろう。一度餌えさ付けしてしまったのだ。

人に甘やかされきった凶太い野良犬のごとく、おかわりを要求しに来るに決まっている。

手の中に残されたのは無駄の結晶、『エトワにお願い券』。それをどう処分しようか眺めていたクリユートだったが、券に描かれたニコッと笑っているエトワのイラストに、ちよっとイラッとしたことで心を決めた。

「捨てよう」

何の役にも立たないゴミなのだ。持つただけでスペースの無駄だ。部屋のゴミ箱に捨てるのすらスペースの無駄で負けた気分になるので、クリユートは部屋の外にあるゴミ箱に向かう。

するとなぜか、廊下の向こうからソフィアがこちらにすすと近づいてきた。

「そのエトワさまが描かれたようなエトワさまが描かれた紙はなんですか？」

極めてわかりにくい言い回しで、ソフィアは十枚のチケットを見つめる。

クリユートは肩をすくめて答えた。



「ああ、『エトワにお願い券』だってよ。これがあればエトワさまがお願いを聞いてくれるらしい。ははっ、こんなもの誰もいらさないよな」

「いらぬ!? なら売ってくださいい！」

ソフィアはクリュートの持つ『エトワにお願い券』に文字通りガシツと食いつく。

「は、はああ!?」

「お金持つてきますね！」

混乱するクリュートを置いて、ソフィアは自分の部屋に走っていった。

そして両手に札束を抱えて戻ってくる。

クリュートたち貴族の子供は、二つの財布を持っていた。一つは公爵家から支給されるお小遣い。平民の子と比べると多いが、常識的な金額のものだ。普段、友達と遊ぶときはこちらを使う。もう一つが貴族の子息としての資産。こちらは軽く大人の貯金ぐらいあって、投資して増やしたり、大きな買い物をしたりするときに使う。

ソフィアが持つてきたのは明らかに後者のほう。目の色を変えてお札を数えだす。

「相場を考えると一枚三十五万リスはしますね……」

いや、そんなにするわけないだろう、クリュートは心の中で突っ込む。

「うう、さすがに全部使っちゃうのはまずい……。三枚！ 今回は三枚だけお願いします！」

ソフィアが差し出してきたのは百五万リスだった。小さな馬車なら新品で買える。公爵家や侯爵家の全財産からすると微々たる額だが、子供にとつては当然大金である。

「え……それ本気で言ってるのか……?」

「これで三枚、売ってくれますよね!?」

「あ、ああ……」

クリュートは呆然としながら、取引に頷く。金はあつて困ることはない。

ソフィアはそんなクリュートの手から、『エトワにお願い券』を三枚だけ抜き取った。

「やったー！」

ソフィアはその券をきらきらした瞳で見つめると、嬉しそうにジャンプしながら自分の部屋に帰っていった。クリュートの手には百五万リスの札束が残される。

「まじかよ……」

クリュートは呆然と呟いた。

\* \* \*

私は明日のお休みに何をしようか考えてた。ふっふ、やはりここはアルミホイルで料理研究を。

そう思つてたらソフィアちゃんがきらきらした笑顔で『エトワにお願い券』を持つてきた。

「エトワさま！ これを使わせてください！」

ソフィアちゃんはクリュートくんと同じく、シルフィール公爵家の後継者候補。銀色の髪をもつ、天使みたいに可愛い女の子だ。私にもよく懐いてくれる。

「な、なんでソフィアちゃんが持つてるの？」

「クリュートに譲ってもらいました」

ゆ、譲ってもらったのかあ……。確かに譲渡は禁止してなかったけど。

まあ子供同士のやり取りだし大丈夫かな？ 金銭とかは関わってないだろうしね。

「それでソフィアちゃんのお願いつて何？」

「明日エトワさまを貸し切りにさせてください！」

なんと貸し切りとな！

「全然いいけど、そんなのでいいの？」

「はい！」

それぐらいならお願い券がなくても聞いてあげられるんだけど。まあソフィアちゃんが楽しそうだしいいかな？ そーいうわけでソフィアちゃんに貸し切られることになりました。

そしてお休みの日の朝。リンクスくんが部屋にやってきた。

リンクスくんも後継者候補の子。ちよっと強気な男の子で、最初、私はあまり好かれてなかったんだけど、今はすごく仲良くしてくれる。嬉しいねえ。

「どしたの？」

尋ねるとリンクスくんは頬を赤くして、顔をそらしながら私に言った。

「きよ、今日はどこか買い物行ったりするの？ 良かったら護衛してやるぞ」

どうやら一緒に買い物に行きたいらしい。

「ごめんね、今日はソフィアちゃんに貸し切られてるから」

「なっ、貸し切り!？」

そんな会話をしていると、ソフィアちゃんが部屋にやってきた。

「エトワさま、まずは買い物に行きましよう！」

「うん、なんでも言ってくれたまえ。護衛の話ありがとね、リンクスくん」

私はソフィアちゃんに腕を引かれて、買い物に出かけた。その日はソフィアちゃんと一緒に町を回って、一日じゅう一緒に遊んで、夜も一緒にベッドで寝た。

抱き枕にされて息苦しかったりもしたけど、貸し切りなのでガマンガマン。

\* \* \*

クリュートの部屋にリンクスがやってきた。

突然の訪問に驚いているとリンクスは鬼気迫る表情で言う。

「お願い券を売ってくれ！ いくらだ!？」

(え、他にも買いたい奴がいたのか……?)

クリュートは内心驚きながら、ソフィアに売った値段を告げた。

「じゃあ四十万リスで頼む！」

なぜか値上がりした。

「七枚あるんだけど、いくら売ればいいんだ……?」

クリュートが尋ねると、ソフィアと同じようにリンクスもお札を数えだす。

「七枚全部……いや、あいつの誕生日もあるから全部使うわけにはいかない……」

ぶつぶつと悩みながら最終的に――

「三枚！ とりあえず三枚頼む！」

また三枚売れた。

\* \* \*

次のお休みの前日。私が何しようか考えていると、リンクスくんが部屋にやってきた。

「エトワさま、これ……」

赤面しながら差し出してきたのは、『エトワにお願い券』だった。

リンクスくんまで譲<sup>ゆず</sup>ってもらったのか。ちよつとびっくり。

「それでだな……その……」

リンクスくんは何やら願い事をごによごによ言いにくそうにするので察してあげる。

「明日、貸し切りでいいの〜?」

「あ、ああ……」

他のお願い事だったら悪かったなって思ったけど、反応的にこれで良かったっぽい。なんか懐<sup>なつか</sup>いてくれてるのがわかって嬉しいよね、こういうの。

次の日、リンクスくんと町までやってくる。貸し切りなので二人つきりだ。

「リンクスくんは行きたいところはある〜?」

「お前の好きなどころでいいぞ……」

そっか、それじゃあリンクスくんの好きな活劇系の劇でも見に行こうかね。

そう決めた私はリンクスくんの手を握って歩き出す。

「よし、それじゃあ行こっか〜」

「お、おい。なんで手を握るんだ……!」

赤面して焦るリンクスくんに私は笑顔で答える。

「だってソフィアちゃんともやったよ。今日の私はリンクスくんの貸し切りだからね〜」

女の子のソフィアちゃんとはかく、男の子のリンクスくんたちは、大人になったら照れて手なんてなかなか握らせてくれなくなると思うから、私がやっておきたかったのは秘密。

こういう機会にたくさん思い出作っておかないとね。

その日はリンクスくんと町のいろんな場所を回った。お願い券、なんか私のほうが楽しんでいて悪いなあって思う。

そして夜。

寝巻き姿でリンクスくんの部屋を訪れた私は部屋を追い出された。  
なぜ？

\* \* \*

クリュートがベッドに寝転んで本を読んでいると、ふと人の気配がした。

「クリュート……」

「うわあっ！」

いきなり傍から声やし、びっくりして起き上がると、いつの間にか後継者候補の一人、ミントが部屋にいた。

「いつの間に入ってきたんだよ！」

「ここですごいアイテムを売っていると聞いて来た……」

微妙に返答になってない返答を返すミントに、クリュートは心の中で『すごいアイテムってなんだよ』と突っ込む。でも何を求めてきたのかは、ここ二週間の出来事でわかってしまう。

「あと四枚しかないけど、どうすんだ？」

「今の相場は一枚五十万リススとして……全部欲しい……」

また無意味に値上がりした。

ミントは持ってきたお札を数えながら残念そうに言った。

「でもお金が足りない……。三枚で頼む……」

「もういいよ、四枚やるよ」

もともと当初の三十五万リススで四枚売ったとしても、今のほうが高い。

お金はあつて困ることはない。でも、よくわからない値の上がり方をしていく『エトワにお願い券』に納得できない思いをしているクリュートは、一枚くらいタダでやることにする。

「そんな貴重なものを無料でもらうわけにはいかない……」

しかし、その提案はミントのほうから拒否されたのだった。

\* \* \*

ミントくんも『エトワにお願い券』を譲ってもらったらしい。

ミントくんはちょっと不思議な感じの男の子で、回復魔法とそれから魔獣を手なずける力をもっている。動物好きの優しい性格だと思うけど、無口なのでわからないことも多い。

あと後継者候補にはもう一人スリゼルくんって子がいる。背が高く礼儀正しい子だ。

それにしてもクリュートくん太っ腹！

私はミントくんと、町を出て綺麗な草原まで行くことになった。交通手段はなんと魔獣だ。四足歩行のホワイトタイガーに似た獣。でも大きさはゾウぐらいはある。

ミントくんの力で手なずけたらしい。

魔獣の背中に乗って野道を駆けるのは、風が気持ちよくて夢中になりそうだった。

「よしよし」

しかも、魔獣はミントくんの言うことをよく聞いて、私にも体を撫でさせてくれる。

毛並みはすべすべ、お腹の感触はふかふかして気持ちよかった。

いい天気で日差しも心地いいし、草原の涼しい風が私の頬を撫でていく。

ソフィアちゃんとの買い物も楽しかったし、リンクスくんのお出かけも楽しかったし、なんかもうお願い券なのに私のほうが得してるよね。

自然の風情を楽しんでるとミントくんが寄りかかってきた。すやすやと寝息が聞こえる。

どうやら寝てしまったようだ。

私は持ってきたバッグから、ブランケットを取り出してかけてあげる。

わざわざ券を使ってもらってるんだから、これぐらいはしておかないとね。

それからはミントくんのためになるべく動かないようにして、本を読んで時間を過ごした。魔獣

さんは一人で草原を遊び回ってた。

お昼には私が作ってきたサンドイッチを二人と一匹で食べる。

たくさん作ってきたけど、さすがに魔獣の胃袋には物足りない量しかない。教えてくれたらもつと作ってきたのに。無口なミントくんはなかなかそういうことは話してくれないんだよねえ。それでも、魔獣さんは美味しそうにサンドイッチを食べてくれた。

午後は魔獣さんの背中に乗ってもらって、森のいろんな場所を回った。

「今日はありがとうね。楽しかったよ」

「エトワにはレタラスのこと見せておきたかったから……」

魔獣さんはレタラスというらしい。

賢いし可愛いし、羨ましい。私もそっち系のスキル取っておけばよかったかもしれない。

\* \* \*

クリュートは残った一枚を困った顔で見つめた。

需要はあるし持つておけばいずれお金になるのだろうけど、ソフィアたちも使える分のお金は使ってしまったので、売るには数ヶ月は待たなければならぬ。

その間は、クリュートのほうで保管しておくことになるのだが、それはなんか敗北した気がするのだ、あのマヌケ顔の主人に。かといって自分で使う予定などは、もちろん微塵もない。

さすがにもつたいたいまいかという気持ちとプライドの狭間で、ため息を吐きながら残った一枚をひらひらさせて屋敷を歩いていると、向こう側からスリゼルが歩いてきた。

ちようどよかったのでクリュートは話しかける。

「よお、スリゼル。これき、エトワさまがお願い事を聞いてくれるチケットらしいんだけど、よかつたら買わないか？ 別に値段はいくらでもいいぞ。余って困っちゃってさ」

それを聞いたスリゼルは答えた。

「はあ？ そんなものいるわけがないだろう」

何言ってるんだという表情だった。

「あ、や、やっぱり……やっぱりそうだよな。はは……」

それはクリュートの考えていた正常な反応だった。

でも同時になんだか意外で、引きつった顔で誤魔化し笑いをしてしまう。

「意味のわからない用件しかないならもう行くぞ」

「あ、ああ……引き止めて悪かったな……」

すたすたといつもの調子で去っていくスリゼルの背中をクリュートは呆然と見送った。

## 第二章 魔王降臨

ヴェムフラムの襲撃で大怪我をして以来、私は暇な夜に剣の素振りすぶをしている。

さすがにいろんな人に心配かけちゃったし、少しは私も強くなりたいと思っただのだ。

そんな夜の素振りすぶの時間だけど、クリュートくんもよく同じ時間に魔法の練習をしている。土の中の金属を集めて槍やを作り出す魔法。もう一年生のころからだ。

クリュートくん、普段はそんなそぶりは見せないけど努力家だよな。

一セットを終えて、いい感じに汗をかいた私はクリュートくんのとこに移動して声をかけた。

「おーい、クリュートくん。休憩しようよ」

クリュートくんはあからさまに嫌そうな顔をする。

「なんですか、エトワさま。邪魔しないでくださいよ」

「まあまあ、ちゃんと休憩しないと、効率も悪いよ」

私はポットに入れてきた冷たいお茶をクリュートくんにずずいっと押しつける。

クリュートくんは迷惑そうな顔をしていたけど、なんだかんだ受け取って口をつけた。やっぱり喉は渴かわいていたらしい。二人でお茶を飲んで休憩する。

「クリュートくんは土魔法が好きなの？ 前からずっと練習してるけど」

「別に、あのとき通じなかったのが気に入らないから練習してるだけですよ」

あのときというとき子供のころ、鉄の巨人と戦ったときだろうか。クリュートくんは鉄の鎗の魔法は、相手に通じず砕け散ってしまった。じっと見ると、クリュートくんは唇を尖らせた。

「気にしすぎだと言って言うんですか？」

「ううん、偉いと思うよ」

だめだったことと向き合わずと努力するなんてなかなかできないことだと思っ。

「護衛役をサボらなければもっといいんだけどねえ」

「あんなのやりたい奴にやらせておけばいいじゃないですか。エトワさまだってリンクスたちといたほうが楽しいでしょう」

「いやいや、それはリンクスくんたちに負担がかかるからだめだよ。というわけで、明日の送り迎えはお願いね」

その言葉にクリュートくんは『げっ』て顔をした。

「代わりに練習するときはお茶作ってきてあげるから」

「別にいらんいですけど」

「まあまあそう遠慮なさらずに」

「遠慮してません」

そんなこと言われてもお茶を持ってく気は満々だった。夜練仲間なのだから助け合わなければ。

この国の第三王子、アルセルさまはとても優しい方だ。

ちよつとぼつちやり系の癒し系なお方で、失格者の私にも親切にしてくれる。クララクでのヴェムフラムの襲撃の際には、大怪我をした私に回復魔法をかけて助けてくれた。本当にお世話になった。

今日はそんなアルセルさまが私の部屋にいらつしやっています。あれからいろいろと気にかけてくださってるのだ。今までも何度かお会いして、今日もそんな感じで来てくださった。

王子さまをおうちにご招待。ちよつとテンション上がるよね。

「お茶をお出ししますね！」

「ありがとう」

侍女さんが準備はしてくれてたので、あとはお湯を入れるだけ。

アルセルさまがお茶菓子を持ってきてくれたので二人で分ける。

「体の調子は大丈夫かい？」

もうあれから何ヶ月も経つというのに、まだ心配してくれる。

「はい、元気でですよ！」

私はアルセルさまを安心させるために、右腕をぶんぶん振り回して力こぶを作った。

「はは、困ったことがあつたら言ってね」

アルセルさまはちよつと苦笑いする。

それから黄色い軟膏みたいなのが入ったビンを取り出して私の前に置いた。

私は首をかしげる。

「なんですかこれ？」

「南の国から取り寄せた火傷やけどに効く薬らしいんだ。良かったら試してほしいなって」

ヴェムフラム襲撃のときの怪我。体はもう治ったんだけど、私の頬にはまだ火傷やけどのあとが残っていた。自分ではそんなに気にしてなかったんだけど、周りから見ると気になるのかもしれない。

「ありがとうございます。使わせていただきますね。塗り薬ですかね？」

「うん、説明書にも書いてあるよ」

ありがたく使わせてもらおうと思う。肌がきれいで悪いことはないしね。

アルセルさまとの会合は万事こんな感じだ。

私の力の正体なんかには極力触れないようにしてくれてみたい。そしてお菓子をくれる。

「そういえばソフィアちゃんたちは今日はいないみたいだね」

「はい、魔法院まほういんでまた魔力の検査を受けてるらしいです」

ソフィアちゃんたちは今もおぐんぐん成長中だ。

また魔力が大きくなったので、魔法院で測ってもらおうらしい。どんどん強くなっていく。

私も普段はついていくんだけど、今日はアルセルさまが来ることになってたから、家にいることにした。

私と使用人の人たちしかいない屋敷でのアルセルさまとの会合は平穩へいげんだった。

護衛役の子たちは王子さまがいると、どうにもそわそわして覗き込んでくるのだ。特にリンクス

くとソフィアちゃん。ミントくんもいつの間にかいて、こっちを見てたりする。

王家の盾たてと呼ばれる風の一族の本能が騒ぐのかもしれない。なんか猫みたいだね。

見るより一緒にお茶を飲もうよって誘うんだけど、そうすると逃げていくのだ。子供たちの心は複雑だ。

アルセルさまの穏やかな声は、不思議と心を癒なぐさしてくれた。

今日はこのまま問題なく、この平穩に肩まで浸かって、ゆつくりと時間が流れていくに違いない。きつとそういう日なのだ。

そう思った私が間違っていた。

トラブルというのはいきなり降ってくる。

窓の向こうから誰かが降ってきて、誰かはそのままの勢いでバーンと窓を開けて、私の部屋に飛び込んできた。私もアルセルさまもびっくりした表情をする。

「おーい、エトワ。いきなりだけど遊びに来たぞ！」

うん、いきなりすぎない？

どうするのよ、これ。

ハナコはアホの子だ。本人が言うには、魔王の娘らしいけど、人間の町で恐喝おそわかし事件を起こし、私とソフィアちゃんに捕まったアホの子。それからいろいろあって仲良くはなったけど、まさかのアルセルさまのお茶会の中で、元気よく私の部屋に飛び込んできやがった。



ハナコはアルセルさまを見て目をぼくりとさせた。

「誰だーお前？」

いや、アルセルさまにとつてはお前こそ誰だつて感じだよ！

どうする。どう説明しよう。

「ま、魔族!? なんでもこんな場所に！」

その頭に生えた角を見て、アルセルさまが咄嗟に私を庇うように立つ。アルセルさまつてば、戦闘系の魔法はまったく使えないのいい人だ……

「なんだー！ やるのかー！」

ハナコの周りにいくつもの魔法陣が浮かび上がる。

「天輝く金鳥の剣」

私は生まれたときに、神様から最強クラスの戦士の力をもらっている。その力は天輝さんという剣に封印されていて、その真の名を呟きながら、剣を抜くことで力が解放される。

私は早速力を解放して、ハナコの後ろに回り込むと、軽くげんこつで数発殴りつける。

「んぎやつぎやつぎやつぎやつ！ ぎゃん!!」

ハナコは気絶こそしなかったものの、その場に立つ力を失い、ふらふらと倒れかけた。

私は一応襟首を掴んで、体を支えてやる。唱えていた魔法も霧散していった。

とりあえずもう、アルセルさまには正直に話すことにした。

「すみません、この子は魔族だけど私の友達なんです。すごくバカですけど、バカな行動を除けば

人畜無害ですから、見逃してあげてくれませんか？」

「痛い。うううう、頭が割れるように痛いぞお……」

アルセルさまは戸惑った表情をしながらも、私の話を聞いてくれる。

「ほ、本当なのかい……？」

「は、はい！ ほら、ハナコ、悪いことはしないよね!？」

私は開いた目に力を込めて、余計なことは言うなとプレッシャーを加えた。

「当たり前だろー！ エトワのうちに遊びに来ただけだ！」

遊びに来ただけなら、先客にいきなり攻撃を仕掛けようとするなど言いたい。そもそもアポ取つてから来い——どんな風取るかは不明だけど。

アルセルさまはまだちょっと混乱した様子だったけど、

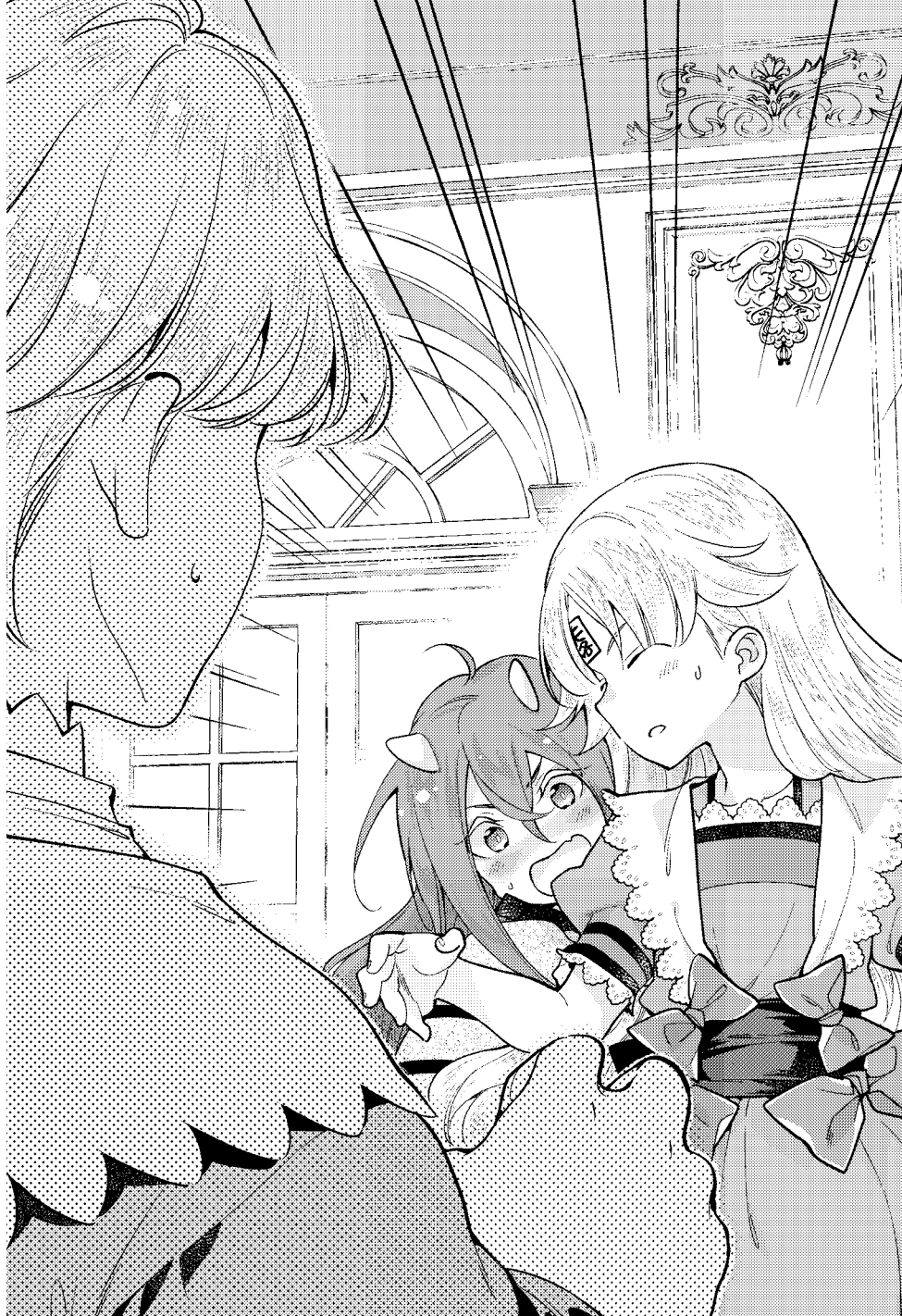
「えっと……僕はアルセル、君と同じくエトワちゃんの友達だよ。よろしくね、ハナコちゃん」

ハナコの存在を受け入れて、自己紹介までしてくれた。その頭を人間の子供を相手にするみたいには撫でる。普通、魔族が友達なんて言ったら紹介した私のほうも、良くて頭がおかしな人で、普通なら危険人物と思われるはずなのに、なんて心が広い方なんだろう。

それに比べて、アルセルさまが相手でなければ大変なことになっていたであろう騒動を引き起こしてくれたハナコはといえば——

「ひゃあっー！」

アルセルさまに頭を撫でられた途端、急に高い声をあげて顔を真っ赤にすると、私の背中に回り



込んできがみついできた。

「な、なんだよ、お前。急に角を触ってくるなんて！ ナンパな奴だなあー！」

「えっ、ご、ごめんね」

ハナコの意味不明な抗議を受けて、アルセルさまは慌てて謝る。

「エトワあ、なんだこのナンパな男は〜。いきなり角に触るなんて常識ってモノがないのか〜？  
ま、まあ容姿は悪くないけどさ……お父さまほどではないけど……」

どうやら魔族の間では、角に触れるのはナンパな行為らしい。

けれど、ハナコは赤面しながらもじもとアルセルさまのことを窺<sub>うかが</sub>っている。

あれ、この反応……。まさか、まんざらでもない……？

「そ、そのごめんね。あまり君たちのこと知らなくて、失礼なことしちゃったみたいで……」

ハナコは私の背中からとことこ出てくると、アルセルさまに近づいていった。

「そうぞー。レディの角に触るのは失礼なんだぞ。オレじゃなきゃ大変なことになってたぞー」

「そうなんだ。ごめんよ」

「特別に許してやるー。特別だからなー、えへへ」

「あ、ありがとう」

「お前もエトワと友達なんだってな。しょうがないから、特別にオレが話し相手になってやる。お茶とお菓子をくれてもいいぞ」

アルセルさまと会話するハナコの顔は普段通りアホっぽかったけど、しっかり女の子の顔をして

いた。正直、めちゃくちゃ意外だ……

いや、アルセルさまはとても素敵な方だけどね。

たださすがにその態度はいただけない。私はハナコに軽く裏拳を喰らわせた。

「んぎゃっ、なにするんだよ！ エトワ！」

「アルセルさまは私の国の王子さまなんだから、あまり失礼な態度はとらないでもらえるかな」

アホなどころは百歩譲って愛嬌としても、アルセルさまには敬意をもって接してほしい。

「王子〜？」

「いや、でも魔族の子にとつては、僕の身分もあんまり関係なかったりするんじゃないかな？」

「アルセルさまも甘いです！ 郷に入つては郷に従えですよ!!」

「そ、そういうものなのかな……?」

「そうです！」

私はハナコにビシツと言った。

「ハナコ。アルセルさまにちゃんと敬意をもつて接することができないなら、この部屋の敷居はあなたがせないからね」

「わ、わかつたよお……」

その日のハナコは、ハナコにしては大人しく私たちと一緒に席についてお茶を飲んだ。

そして積極的にアルセルさまに話しかけていた。アルセルさまもハナコが悪い魔族ではないと理解してくれたのか、私たちに接するのと同じように、ハナコにも優しく接してくれていた。

その日はそれで良かったんだけど、次の日からが大変だった。

「エトワ、遊びに来たぞー。あいつはいないのか？」

次の次の日も。

「アルセルはいないのか？ 王子さまだから忙しい？ いつ来るんだよー」

さらに次の次の次の日も。

「なーなー。アルセルはまだ来ないのかー。なー、エトワー」

次の次の次の次の日も。

「アルセルはー？ 今日こそいないのかー!？」

さすがに私もハナコの顔を片手で掴んで、一度相談することにした。

「ハナコさんや。友達として来てくれるのは嬉しいけど、さすがに毎日はやめてくれるかな。ソ

フィアちゃん以外にもうちには魔法使いの子がいるし、見つかったら大変だってわかるよね」

「隠蔽の魔法を使ってるから、そんな心配ほとんどないぞー！ あと今のお前が半目で睨んでくると、すごく怖いぞー!」

普段は糸みたいに細い目の私だけど、力を解放するとき目は目が開くようになってる。

「だめ、万一のことがあるでしょ。というか聞くの忘れてたけど、なんで私の住所知ってるのかな？」

「ハチが調べてくれた」

あの犬の名前魔族！ 町の待ち合わせ場所に、新しい目印として吊るしてやるのか！  
 「とりあえず、私の家に来るときは、ちゃんとアポを取ることに。そして月一ぐらいの頻度にするこ  
 と。切手と便箋あげるから、どうにかしてポストに投函して。守ってくれたらアルセルさまと会う  
 機会も作ってあげるから」

「わ、わかったあ……」

どうやら相談はうまくいったようだ。アルセルさまとはなるべく、郊外で会おう……。ハナコと  
 護衛役の子たちが衝突したらしやれにならない。

それでようやくハナコの件が解決したと思ったら、夜に再び魔族の気配がした。

またハナコかと思つて、天輝さんを解放しながら、窓を開けたら違った。

鳥の仮面をつけた魔族。ハナコとの会話にも出てきた『ハチ』という魔族だ。ハナコの護衛が仕  
 事らしいけど、性格はなんというか……

「久しぶりだな、赤目の守護者よ。いつもハナコさまが世話になつている」

「いや、さすがにここまでお世話するつもりはなかったんですけど！ というか、よくも私の住所  
 を勝手に調べてハナコに教えてくれたね」

ここ数日、迷惑をかけられまくった私のキレ気味の言葉に、ハチはふつと笑つて少し誇らしげに  
 答える。

「それならば私の隠密力と索敵能力をもってすれば造作もないことだ」

いや褒めてねえよ！ 苦情だよ！  
 ただもう何を言つても無駄な気がして、私は早めに追いつ返したくて用件を尋ねる。

「それで、何の用なの？」

「ああ、今日は残念ながら、ハナコさまについての用件ではない」

残念でもなんでもないことを私に言つたハチは、少し間を置いて真剣な声で告げた。

「魔王さまが貴殿に話があるそうだ」

ハチが黒いクリスタルを掲げる。クリスタルからは黒い霧が溢れ出し、何かの姿をかたどつてい  
 く。現れたのは、見たことのない巨体の魔族だった。

縦にも横にも大きくて、椅子に座っている姿勢なのに、頭が部屋の天井に届きそうだ。

その頭には犬の頭骨のようなものを被つていて顔が見えない。巨大な全身を、見たこともない素  
 材の防具と、マントが覆っていた。まさに魔王つて感じの迫力がある。

『エトワ、戦闘は避ける。今の我らでは勝てない』

私の心の中から、男性の声が警告する。私の力を封印した剣に宿る人格、私の半身ともいえる天  
 輝さんの声だ。いろんなことができて、いつも私のことをいろいろ助けてくれる。

そんな天輝さんが勝てないと断言するのは初めてのことだった。実際、その身からは凄まじいプ  
 レッシャーが漏れ出ている。ヴェムフラムとは比較にならない、真正正銘の魔王がいた。

魔王は犬の頭骨に空いた眼窩のその奥に光る金色の瞳で私を見つめる。

そして口を開き言つた。

「FF外から失礼します」  
なるほど、そうくるのか。

その言葉に私が硬直していると、魔王さまはちよつと照れくさそうな仕草で頭を掻き、その姿に似合わない、もったいぶるような癖のある口調で私に話しかけてきた。

「ふふふ、斬新な挨拶に呆気にとられてしまいましたかな。これは失礼」

呆気にとられたというか、うん……魔王の口から聞くとは思ってなかった言葉に啞然とした。

「この挨拶は異界で行われていたものでしてな。今まで繋がりもなかった他者に話しかけると、礼儀を欠かないように事前に謝罪しておくという、とても高度に文化的な風習として行われてきたものらしいですよ」

魔王さまは○イッター地方で行われてきたその風習を、丁寧に私に解説してくれる。最初は魔王さまも私と同じ転生者なのかと思っただけ、どうやら違っつばい。

「そうなんですか」

それしか言い方がない。私の反応に魔王さまは嬉しそうにうんうんと頷く。

「ええ、そうなんです」

どうにも話すことだけで満足している気配がある。犬の頭骨の眼窩から覗く金色の瞳も心なしかにっこりしてる気がする。その行動パターンはちよつとオタクつばい。

「でも、どうしてそんな異世界のことを知ってるんですか？」

私は気になることを尋ねてみた。自分が元はその世界の住人だったことは話さずに。

「さすがは赤目殿。良い質問です。ハチが世界有数の強者と見込むだけではありません」

魔王さまはうんうんと頷きながら、あつさり魔族たちの事情を説明してくれる。

「そもそも我らが北の城にいるのは、その地下にこの世界で最大の遺跡が存在するからなのです。そこには古代の文明の遺産、異界からの遺物などが何万年も前から眠っています。世に出れば世界に混乱を招く危険な情報、目覚めれば世界をそのまま破滅に導くような遺物まであります。これらを世に出さないように管理し、研究してきたのが我ら北の城に住む魔族の一族なのです」

私の世界の創作物だと魔王といえれば世界を滅ぼしたりする側なんだけど、どうやらこの世界ではむしろ守る側だったみたいだ。人間側からはその辺きつちり誤解されているけど。

真剣な口調で事情を語った魔王さまは、急にテンションを上げて懐から何かを取り出す。

「そしてその遺物のうちの一つがこれ！ 神の石版と呼ばれるものです！」

それは美しいゴールド塗装のボディに、美しい高解像度のディスプレイ、シンプルながら機能美を備えたデザイン、間違いなく○○パッドだった。りんごのマークのアレ！ しかもPR○！

魔王さまはそのボディを愛おしげに撫でる。

「ふっふっふ、すごいでしょう。この形、この手触り、すべてが完璧で神が創ったとしか思えない造形物です。しかし、この石版は美しいだけではありません。数万年前の遺跡から発見されたこの石版の内部には異界のあらゆる情報が記録されているのです。さきほどの挨拶もここから学んだものです。我々は時間をかけて、この中にある情報を解読しています」

魔王が嬉しそうにホームボタンを押すと、画面が光り輝き、お馴染みのUIが現れる。

なるほど、と私は納得した。それなら魔王さまが○イッターの一部でしかやってない挨拶をしてきたのも納得がいく。神さまの世界にも○○パッドが導入されてたくらいだ。この世界に流れ着いてきていてもおかしくない。

人によっては何万年も経ったタブレットが動くのかと疑問に思うこともあるかもしれない。確かに普通のタブレットなら、こんなに年数が経てば動かなくなってしまうだろう。

しかし、○○パッドPROはあの○ツ○ル社が提供するタブレットの最高級機種。数万年の時を経て稼動していても何の不思議もないのだ。

「実を言うと我々の名前も、この神の石版に由来しているのですよ」

そう言うと魔王はぼちぼちと楽しげに○○パッドの画面をいじる。

そしてある画面を私に見せてきた。そこには大きくこう書かれていた。

犬の名前・pdf

そのファイルのタイトルと<sup>意味</sup>思しき題字の下には、延々と単語が羅列されている。

ポチ、コロ、クロ、シロ、ハチ、ハナコ、さくら、ラッキー、ラブ……

「これは異界の言葉で『犬の名前』。つまり大いなる存在の名前を記した物だと解析されてます」  
いえ、犬の名前なんですけど。

確かにちよつと惜しいけど、大じゃなくてそれ犬……。いぬ……

「我々北の城に住まう魔族は、ここから名前を拝借するようにしたのですよ。我が娘もここから借

りてハナコとつけさせてもらいました。いい名前でしょう」

魔王さま——確か名前をポチさんという彼は、照れながらも誇らしげに自分たちの名前について語る。

私は世界平和のために、それ全部ペットの名前ってことは、墓場までもっていくことに決めた。

魔王は楽しげに○○パッドをいじり回しながら、○イッターの挨拶の話や、北の城の魔族たちの名前の由来を話したあと、少し困った顔をしてため息を吐いた。

「しかし、実は最近困ったことがありますな」

「困ったこと？」

「ええ、実は神の石版——といっても今のこれよりもかなり小さいもので、これぐらいの大きさなのですが。それを持ち出した者がいますな」

そう言って魔王がジェスチャーで示したのは、○○フォンらしきサイズのものだった。

「これら神の石版は、古代の遺跡を起動するキーアイテムにもなっているのです。北の城の地下に眠る遺物の中には、恐るべき力をもった兵器がいくつも存在します。城の外に住む野良魔族たちの中には、これらの兵器を手に入れようと企む者たちがいますな。だから、そのような者の手に渡らないように管理していたのです。しかし十年前に北の城の住人であったはずの魔族が、そのうちの一つと神の鍵を盗み外部へと流出させました」

魔王は真剣な声で言う。

「その者の名はパトラッシュ」

天輝さん……僕なんだかとっても眠いんだ……

『……………』

「我らも追っ手を出したのですが、足取りを掴むことは叶いませんでした。持ち出された石版そのものは、遺跡への干渉力が小さく、世界が滅ぶなどの大きな問題にはなりません。しかし……」  
魔王は金色の目を瞑り、憂いのため息を吐く。

「その石版にも異界の情報が保存されておりました。あちらの文化だけでなく、兵器の設計図が。その兵器も我らからすると大きな脅威ではありません。しかし、魔力をもたない人間や動物などを殺傷するには十分な威力をもつものです。何より危険なのはその扱いの簡便さ。実用できるレベルに再現すれば、それは剣などより簡単に、遠くから、対象を殺すことが可能でしょう」

私はその情報から、その兵器が何か予想がついてしまった。

たぶん、銃だ。銃の設計図がこの世界に流出してしまっているってことかあ。

それはちよつと……かなり危ない気がする……。あ、でもそれなら。

私は○○パッドのある機能を思い出した。

「その神の石版を使って、アイ……別の石版を探すことはできないんですか？」

たしか○○パッドにはそういう機能があったと思う。

「おおっ、さすが赤目殿、博識ですな。確かにこの石版にはそのような力があります」

魔王は嬉しそうな顔で頷くが、その後、首を横に振った。

「ですがこの石版は永く遺跡に放置されていたことにより、一部の機能を損失してしまってます。ここに触れても反応を示さないのですよ。残念ながら、その力も発動できない状態にあります」

さすがに○○パッドといえども数百万年の時を経て、万全の状態にいるわけにはいかなかったらしい。魔王さまは例のアプリがある場所を何度も触るけど、何も反応が返ってこない。

「神の鍵があれば、事情が違うのですが、それも石版と一緒に盗まれてしまったのです」

「神の鍵？」

「ええ、白く小さいステッキのようなモノです。それがあれば、この神の石版のすべての機能が使えていたのですが」

それってもしかして……

私は自分のもう一つの半身を呼び出した。

○○ルペンシルさん!!

私の手のひらに白いスマートなペンが出現する。神さまが使ってるのを間違えて持ってきたら、私の魂と混ざってしまったのだ。

「おお、それはー」

「まさか、お前が犯人だったとは……!!」

飛びかかってきたハチを、峰打ちで張っ倒すと、別の方角から黒色の棒みたいのが出てきて、それもハチを張っ倒した。

「ぐはっ」

二つの攻撃を受けハチが床に沈む。

「失礼、ハチは優秀な戦士ではあるのですが、少々コミュニケーション能力に問題がありまして」「ええ、知ってます」

二人してハチを床に沈めた魔王と私は、軽く流して話を続ける。

「もちろん、その神の鍵が我々の持っていたものと別の個体であることはわかります。しかし、赤目殿がまさかそのようなものを持っているとは。しかも、魂たましいのレベルで同化されている。あなたはとても奇特きとくな生まれ方をされたようだ。もしかしてあなたは異界から——！」

「いいえ、たまたまです」

私はにっこりと笑って、魔王の想像を否定した。

だって、前世はあの世界の住人だって知られたらすぐ面倒なことになりそうなんだから……

「そうですか。不思議なこともあるものです。お願いがあるのですが、その神の鍵を一時的に貸していただけませんか。用が済めばすぐにお返ししますので」

「はい、もともとそのつもりでした」

「○○ルペンシルさんを貸すのはやぶさかではない。○○ルペンシルさんも本来の仕事ができて喜んでくれるだろうし。」

「えっと、ハチに渡せばいいですか？」

魔王は実際はここにいないのでハチに運んでもらうしかない。そう思っていたら——

「いえ、私の手に置いてくだされば大丈夫です」

何も無い虚空こくうから、いきなりにゆつと腕が出てきた。さっきまで幻影で見てたのと同じ腕だ。

『空間転移、いや連結か。しかも一部だけ。それをいとも簡単に……』

天輝さんが驚いている。

私もびつくりだ。空間を操る魔法使いとは以前、戦ったことがあるけど、こんなに簡単に空間を移動できてはいなかった。それより距離が長く、しかも一瞬ではなく安定させたまま、造作もないように繋いで、腕を私に差し出している。

「すみません、城を離れられない身なので、腕だけで失礼を」

「いえいえ」

私はその手のひらに、○○ルペンシルさんを預けた。

繋がられた空間が閉じて、向こうの映像に○○ルペンシルさんが現れる。

「それではお借りした神の鍵を使い、神の石版に備えられた別の石版を探す力を起動させます」

魔王はきちんと○○パッドと○○ルペンシルさんをペアリングさせると神々しく掲かかげる。

「この力は異界の言葉でこう呼ばれたそうです」

魔王は一度深呼吸すると宣言した。

「○○フォーンヲ、サガアース！」

呪文つぼく叫なびんでよろしい！

「○○ルペンシルさんで画面をタッチすると、○○フォーンを探す画面が起動した。同じアカウントで、電源が入っていれば、○○フォンの位置が地図に表示されるのだ。」



「出ました」

一瞬、GPSがない異世界でその機能が使えるのかと不安を覚えたけど、魔王が見せてくれた画面にはしっかりと〇〇フォンの位置が表示されていた。さすが〇ツ〇ル社だ、すごい。

「ふむ、ちよつと地図が見づらいですな」

魔王は慣れない、たどたどしい手つきで、〇〇フォンの搜索画面をいじりだした。

「ここですかな？」

初めてで操作方法がわからなかったのか、その指が画面左下のボタンへと向かう。

「あつ、だめ！」

私がそう言ったときには遅かった。

そのボタンは、部屋などで見つからない〇〇フォンを探すために、遠隔操作で音を鳴らす機能だった。この場合、盗まれた〇〇フォンの所持者に、こちらが探していることを知らせてしまう。

五十秒ぐらい経ったあと、〇〇フォンの表示が消えた。所持者が電源を落としたのかもしれない。

「むう、すみません。この力には初めて触れたので……」

まあ、仕方ないのかもしれない。使い慣れてなかったんだし。

それにあちらも迂闊うかつには〇〇フォンを起動できなくなった。

魔王が言う。

「とりあえず、盗まれた神の石版が人間たちの生活圏にあることはわかりました。パトラッシュは人間社会にその身を潜めているのでしょうか。もしくは人間から支援を受けているか……」

どうも危険な遺物とその情報が人間社会にもたらされてしまったらしい。

「赤目殿、残念ながら私はこの城を離れられません。この城にはもつと危険な遺物たちも存在します故に、私にはそれを監視する義務があります。盗まれた神の石版については、配下の魔族たちに搜索を託すしかないので。ですが、人員が多すぎれば、人間社会に無用な混乱を与え、それもまた争いの火種ひなごとなってしまうでしょう。赤目殿もどうか神の石版の回収に協力してくれませんか。積極的に探してくれとは言いません。もし見かけることがあったら回収してくださいだけでいいです」

「わかりました。それぐらいなら」

正直、見つける自信はなかった。

この国だつて広いしね。でも、石版がもたらす情報は、ソフィアちゃんたちみたいな魔法使いには危険じゃなくても、普通の人には十分に危険なものらしかつた。じゃあ、魔王さんのところで管理されてほしいよね。あんまり自信はないけど、やれることはやろう。

魔王は安心した表情を目元に浮かべて頷く。

「ありがとうございます。赤目殿のような強き存在と縁がもててよかつたです」

私のほうは魔王とこんなことになるとは思わなかつたよ……

ちよつと疲れた思いでそう思っていたら、魔王がまた私に話しました。

「さて本題ですが」

え？ さつきのが本題じゃないの!?

びつくりした私に、魔王の幻影がずっと近づいてきて、至近距離から本題を述べてくる。「お世話になっている娘のハナコなんですが、最近特に頻繁にあなたのもとへ訪れているとか」私はぎくつとなった。

これは非常に覚えがあるやり取りだ。娘をもつお父さんと話したときにありがちな……私はアルセルさまの身の安全を考え、誤魔化すことにした。

「ハナコも遊びたい盛りですしね。そういう年頃なんでしょうね、はは」しかし、魔王はさすがいとさらに映像の顔を私に近づけてくる。

「それで、好きな男性がいるのだとか……」

「そ、そうなんですか？ 初耳ですねー。何かの間違いじゃないでしょうか。ほら、ハナコさんはよく言えば無邪気な性格ですから。恋なんかはまだ早いと……」

魔王は少し沈黙すると、ぼそりと囁いた。

「アルセルさまとは、どのような方ですか……？」

ハナコオオオオオオオオオ、思いつきりバレとるやないけー！

ハナコが思いを寄せる男性の名前は、父親である魔王にすっかり漏れていたようだ。

頭がズキズキ痛みだす。

やばい、これはやばい。下手すると殿下の命の危機に、いや国家の危機に発展しかねない。ヴェムフラムとは比べ物にならない本物の危機的な感じで。

「その、私も過保護だと思おうのですがね。しかし、大事な娘ですから。もし悪い男にひつかかって

は、ほらわかるでしょ？ 父親として、見過ごせないというか。そもそも、まだ娘の年頃では恋人を作るなど早いと思うんですよ。そうですね？ ね？ その、娘をたぶらかした、と言ってしまふと聞こえが悪いかもしれません、失敬。まだそんな悪い男と決まったわけではありませんからね。そうです、私も冷静に対処しなければいけません。だからこそお聞きしたいのです。ええ、聞かなければなりません。それが父の義務というものです。娘を大切に思う親として当然のことではないでしょうか。そのアルセルさまというお方とは、赤目殿もどうやら親しいようですね。ぜひともどのような方かお聞かせ願えないでしょうか……ね!?」

犬の骸骨の奥の金色の瞳をぐるぐるさせた魔王に、私は冷や汗をだらだらかきながら、できるだけけにっこりと品の良い笑顔を作って答えた。

「アルセルさまはとても素晴らしい方です。優しく紳士で、身近な人みんなに慕われています。とても分別のある方で、人の道に外れることは決してしません。ハナコさんとは歳も離れていますし、魔王さんの言うような心配はないかと存じます。アルセルさまにとってハナコは、甘えてくる小さな妹みたいな存在ではないでしょうか」

「……そうですか、どうやらとても良いお方そうですね。いや、杞憂でした。失礼しました。ハナコともまだそういう間柄に発展する可能性はなさそうということですね。とても安心です。赤目殿がそう言ってくださるなら信用できます」

魔王は金色の瞳に、笑みを取り戻して頷いた。

私もアルセルさまの危機を回避できてほっとする。

「初対面で女性の角を撫でるようなナンパな男だったらどうしようかと思ってきましたよ、はは」  
「はは……。そうですね……」

私はさっと糸目をそらしながら、乾いた声で頷いた。どうしようって、どうするつもりだったんだろう……。いや、考えまい。

「赤目殿、今日はありがとうございました。とても助かりましたし、非常に有意義な時間を過ごせました。あ、この神の鍵はお返ししますね」

また空間から腕が出てきて、○ッ○ルペンシルさんを私の手のひらに置いていった。

おかえりなさい、○ッ○ルペンシルさん。

「それでは、またお会いしましょう。神変なる赤目の強者殿」

そう言うとう魔王は消えていった。床に気絶したハチを残して。

……連れて帰って？

### 第三章 Sランクの冒険者

ポムチョム小学校でお世話になってる先生の一人、ウィークマン先生。

弱気な性格だけど優しいその先生に、私は放課後、呼び出しを受けていた。

何かしたっけ。そう考えながら職員室に着くと待っていたのは、困った感じの顔の先生だ。

「よく来てくれましたね、エトワくん……。あらかじめ言っておきますが、今から話すことは、君が少しでも嫌と感じたら、すっぱり断ってくれてもいい話なんです」

ん？ お説教かと思っただけど、何かのお願い事だろうか。

ウィークマン先生の表情は、その話を私にすることかなり躊躇いがある様子だった。

「Sランクの冒険者から、君に臨時のガイドを頼めないかって話があるんです」

「えええっ!？」

話の概要はこうらしい。

Sランクの冒険者パーティーの専属ガイドが馬車の事故で怪我をしてしまった。そういうときは、しばらく冒険を休むのだけど、そのパーティーはすでにとある依頼を受けていて、期限が残り十五日に迫っている。

一方、ガイド業界は繁忙期で、まともなガイドはみんな冒険に出てしまっていた。